

私 の 夫 の 工 夫

学校給食でつなぐ食に関する指導

倉敷市立第二福田小学校

栄養教諭 鈴木 美穂



1 はじめに

食は生きていく上で欠かすことのできない大切なものであり、健全な生活を送るためには健全な食生活は欠かせないものである。また、おいしく楽しく食べることは、人に生きる喜びや楽しみを与え、健康で心豊かな暮らしの実現に大きく寄与する。

本校は児童数約790名、校内に給食調理施設があり、私は栄養教諭として学校に配置されている。栄養教諭は、学校給食の管理と食に関する指導を一体として行うことが職務であり、学校教育活動の様々な場面を捉えて食に関する指導を進めている。中でも給食の時間は、児童共通の食体験の場であり、給食は、見て・嗅いで・食べることができる、まさに「生きた教材」である。児童にとって

身近な給食を教材としながら、「食の大切さを知り、食を楽しむことができる児童の育成」を目指して、様々な取組を行っている。

2 教科と給食をつなぐ取組

(1) 2年生生活科「すじとり・さやだしをしよう」

季節の野菜に触れることで、野菜への関心を高めることを目的として、翌日の学校給食で使用するさやえんどうのすじとり・アラスカ豆のさやだしを行った。

はじめはおそろおそろすじとり・さやだしをしていた児童も、コツをつかむとスムーズにできるようになった。学習の振り返りには、「20こできたよ! たのしかった」「はじめはむずかしかったけど、じょうずにできるようになってうれしかった」「ぜん校のみ

んなにおいしくたべてほしい」といった感想が書かれた。



すじとりの様子

すじとり・さやだしの様子や2年生から全校児童へのメッセージを動画で撮影し、当日の給食時間に全校放送した。さやえんどうやアラスカ豆は、苦手とする子どもが多い傾向にあるが、自分たちが関わってできた給食がうれしく、頑張って食べる児童の姿がみられた。

(2) 6年家庭科「給食の献立をたてよう」

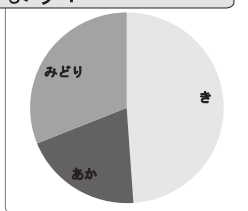
給食は、栄養のバランスの取れた食事のモデルである。家庭科での既習事項を生かしながら、6

年生が給食の献立作りに挑戦した。クラスから1つの献立を3学期の給食に取り入れることとし、班活動で献立作成を行った。その際、児童に献立作成用のスプレッドシートを配信し、主食・主菜・副菜・汁物を組み合わせることで栄養のバランスが整うことや、給食には多様な食材を使用することが理解できるように工夫した。

6年生が立てた献立は、単に栄養のバランスが整っているだけでなく、「おいしく食べてもらえるよう、全校のみんなが喜ぶ献立にした」「旬の食材を多く使うよ

献立をつくってみよう!

名前	使われている食品
主食	こめ
主菜	とりにく みそ うめ しそ
副菜	若鶏の胸みそ焼 き
汁物	はくさいのあえもの
デザート	じゃがいも みそしる
牛乳	牛乳
き	あか みどり
181.5	74 115.3



※牛乳以外の分量バランスです

献立作成用スプレッドシート

掲示板に、毎月の給食盛り付け表を拡大印刷したものを掲示



6年生が献立を立てた給食

うにした」「1食の中でいろいろな味が楽しめるようにした」など様々な工夫がみられた。

6年生の献立が給食に登場する日には、献立の工夫などを全校放送で紹介した。下学年の児童も6年生が立てた献立とあつて、「6年生の気持ちを大切にして食べよう」という意欲がみられた。管理職による検査のコメント欄にも「最高の組み合わせ!!」と記載があり、栄養教諭顔負けの献立が立てられていた。



写真入りで給食の
紹介をしたカレンダー

し、その日の調理の様子や食材等の写真入りの記事を貼り付けている。調理場内は、栄養教諭と調理員しか立ち入ることができないため、校内に調理場があっても、児童が給食調理の様子を見ることは難しい。調理の工夫や調理前の食材を紹介することで、児童が給食や食材に関心を高めることや、調理をする方への感謝の気持ちをもつことができるかよいと考えている。

掲示板は、給食場近くの目に
つきやすい場所に設置されてい
るため、児童や教職員がよく感
想を伝えてくれる。参観日など
で来校した保護者がじっくり読ん

くださる姿も見られる。また、調理員も自分たちの調理の様子がどんなふうで紹介されるかを楽しみにしており、掲示ひとつであるが、児童・教職員・保護者のつながりを生むツールとなっている。

肥満・やせ傾向の児童、偏食・少食の児童等、どのクラスにも給食の配膳に配慮が必要な児童がいる。配膳の仕方や配食量の調節など給食指導に苦慮している学級もあったため、夏季休業中に給食指導に関する校内研修を行った。栄養教諭から基本の配膳の方法を伝えるとともに、児童一人一人の体格等の状況をクラスごとに一覧表にして、各担任に配付した。同じクラスの中でも体格差があり個人によって必要量が異なることや、配食量に留意が必要な児童がいることを伝えた。また、偏食の児童への対応については、無理に食べさせる対応は逆効果になる可能性があること、しかし児童が食べることには挑戦するきっかけになるような配膳や声かけなどは継続してもらいたいことなどを説明した。

その後、学年団に分かれて給食指導に関する悩みや工夫などについて話し合う時間を設けた。担任からは、「給食指導について、じっくり話すことができた」「他の先生の給食指導の工夫や効果的な声かけを知ることができてよかった」などの感想をいただき、二期からの給食指導に早速生かしている様子もみられた。

現在校内にある給食施設は、令和7年7月で廃止となり、8月以降の給食は新設の共同調理場からの配送となることが決定している。給食が共同調理場からの配送となつても、児童の体と心を満たす給食の提供、児童が生涯にわたつて健康で豊かに過ごすための礎となる食に関する指導は、栄養教諭の職責であることに変わりはない。共同調理場と学校とで物理的な距離ができる分、児童の実態や学校の状況を把握する努力が今以上に必要になると考える。食を専門とする教員として、児童や教職員、保護者から頼られる存在であり続けることができるよう、さらなる研鑽を重ねていきたい。

の夫私工

特別支援教育コーディネーターとして実践してきたこと
 生徒一人一人が前向きに学校生活を送るために

倉敷市立西中学校

教諭 上田 美帆



1 はじめに

平成31年度より令和5年度までの5年間、校内において「特別支援教育コーディネーター」という役割を担い教育活動を行った。最初は、特別支援学級の担任を受け持つようになってから日も浅く、知識も経験も少ない中、手探り状態で過ごす日々であった。しかし、多くの生徒・保護者との出会いや特別支援教育に関する研修への参加、同僚や管理職の先生方の理解と協力により、様々な実践を行うことができた。

今回は3つの実践を紹介する。

2 実践内容

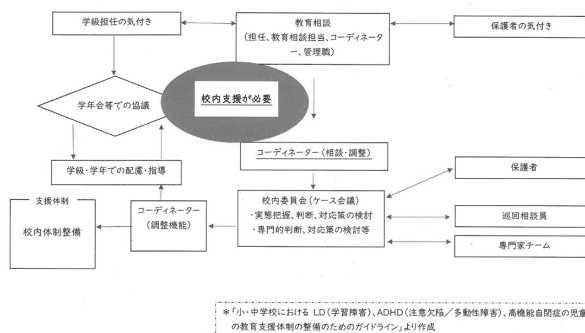
(1) 校内支援体制を整える

当初は定期的に校内教育支援委員会が年に2回行われていた。特別に支援を要する生徒が増加しており、個々の支援に関わるケース会議を充実させていく必要があった。そこで、特別支援教育を学校全体で行いたいと考え、研修で学んだ「支援に至るまでの手順」を校内で紹介することにした。その後、実際に学習障害をもつ生徒への支援が必要になり、担任や学年団、管理職と共にケース会議を開き、医療機関とも連携の上で合理的配慮の実施に至った。このことをきっかけに「支援に至るまでの手順」について、共通理解を図る

(2) 合理的配慮とその注意点

ことができた。この「支援に至るまでの手順」は、毎年、年度初めに必ず教職員に提示して共通理解している。

＜支援に至るまでの手順＞



校内で紹介した「支援に至るまでの手順」

＜合理的配慮＞

- ルビ打ち（読み書き障害）
- 授業や試験時における文章の読み上げ機能（アプリ）の使用（読字障害）
- 試験時における計算用紙（ノート）の使用（算数障害）

＜合理的配慮の注意点＞

- 合理的配慮を実施する際に、教員だけで必要な支援を判断・実施することが難しいこともあった。そこで、次のことを注意した。
- 医療機関や福祉機関、療育機関の関係者に、ケース会議への参加を依頼した。
- 生徒の担当医師から直接話を伺った上で具体的な支援につなげた。（本人・保護者の同意を得て実施）
- 合理的配慮を必要とする生徒への対応を学ぶため、専門家派遣事業を利用し、校内研修を充実させた。（車いすの介助方法、学習障害に関する研修など）

- タブレット端末への「デイジー教科書」のダウンロード（読み書き障害）
- 解答用紙の拡大（発達性協調運動症）
- 聞き取りテストの別室受験（聴覚障害）
- 段差や階段への手すりの設置（足に装具をつけて歩行している生徒への対応）

○学校の設備に関することは、管理職の先生に相談し、倉敷市教育委員会教育施設課を通して設置に至った。

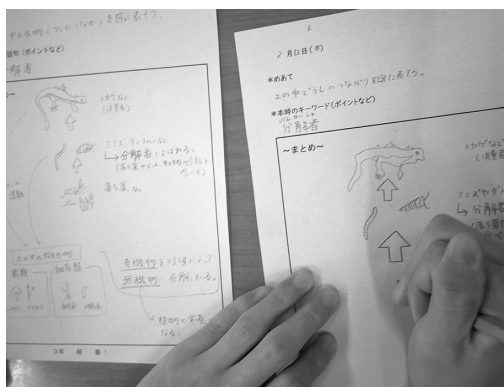
(3) 授業で行った取組

私は理科を教えており、基本的には、観察や実験を交えながら授業を行っている。教室で授業を行う時には、導入↓説明↓グループ学習↓まとめ(プリント)↓振り返りという流れとなる。このまとめの時に、板書を写す代わりに、まとめプリントに取り組むようにしている。現在、通常学級の授業で行っていることがある。それは、「まとめプリントへの取り組む方法を生徒自身が選択する」というものだ。

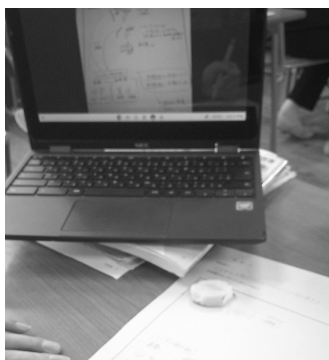
○授業を元に自分自身のまとめ方でプリントに取り組む。

○タブレット端末に送られた見本を見ながらまとめプリントに取り組む。

○見本のプリント(紙)を受け取り、それを見ながら、まとめプリントに取り組む。



紙の見本を見ながら
まとめている様子



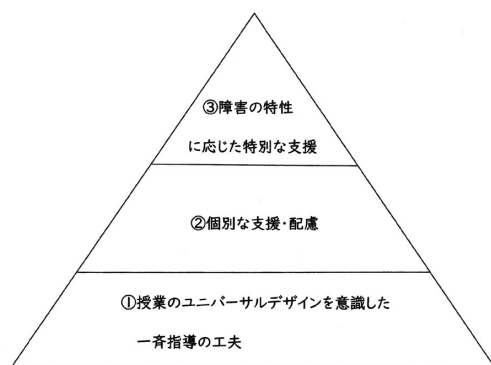
タブレット端末に送られた
見本を見ながら
まとめている様子

○見本のプリント(紙)に線を引いたり、書き加えたりしてまとめに取り組む。
これらの中から生徒自身が、自分にとって取り組みやすい方法を選びまとめを行う。

この取組を行うきっかけとなったエピソードを紹介したい。ある年に受け持ったクラスに、病気の

影響で多くの文字を書くのが難しい生徒Aが在籍していた。学習意欲の高い生徒であった。本人・保護者の要望もあり、板書計画をコピーしたものを授業のはじめに本人に渡し、それに書き込む形で授業を受けることになった。それが思わぬ広がりを見せた。ある日、そのコピーを見ていたクラスメイトBが「A君、書き終わったらそれ貸して」とコピーを見ながらノートをとっており、「こつちの方が、ノートが書きやすい!」と言ったため、次の授業ではBの分もコピーを用意してみた。すると、クラスメイトCも「いーなー、俺もほしい!」と言い始めた。では、ほしい人には渡せるようにと数枚用意したところ、数人が手をあげて利用し始めた。それ以降はどのクラスでもコピーを用意し必要な生徒には渡すようになった。1人1台タブレット端末が配布されるようになってからは、データで送るようになり、今の形になった。学習障害の診断はないが、書き写すことに苦手意識をもっている生

徒は、自分で選ぶことで前向きに学習に取り組むことができた。



特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり

3 おわりに

ある研修の中で、「障害のある生徒に行う支援は全体の生徒にとっても分かりやすい」と教えていただいた。実践を行う中で、その通りであると感じることが多かった。これからも、個々の特性に応じた支援を続け、全体への工夫につなげていき、生徒一人一人が前向きに学校生活を送れるようになっていきたい。